

ステビアの病害について

新 留 伊 俊

(鹿児島県農業試験場)

NIIDOME, I.

Diseases of *Stevia rebaudiana* Bertoni M.

新しい甘味作物としてステビア (*Stevia rebaudiana* Bertoni M.) が住田によって1971年わが国へ導入されてから各地で試作されている。鹿児島農試では1974年から試作しこれに発生する病害の種類、発生消長および被害について調査中であるが、現在までに得られた結果について報告する。

発生した病害の種類

白絹病, *Rhizoctonia* 病, 菌核病, 灰色かび病, ウィルス症および葉先枯れ葉縁枯れ症を認めた。

1 白絹病 (*Corticium rolfsii* Curzi)

茎の地際部及び根を侵すので株ごと萎凋枯死する。5月から11月まで長期にわたって発生し盛期は7~9月であった。

被害はきわめて大きく約70%の欠株を生じた例もあり、ステビアの病害のうち最も被害が大きい。

2 *Rhizoctonia* 病

病徴及び病原菌の培養型から2つの型が見られた。1つは、初め接地した下葉に発生し、湿潤な天候下で急激に下葉全葉に拡大し、ついでかなりの高さまで侵す。繁茂した倒伏した株に発生が多い。6月から10月にかけて発生し盛期は7~9月であった。

葉は初め熱湯をかけたような水浸状となり、ついで暗緑色のち乾燥して黒褐色となる。茎では稀にごく若い部分を侵すが成木は侵さないようである。病患部にはよく菌糸がからみつき、また1~3mmの球形-扁球形で初め白色のち黒褐色の菌核を形成する。

本病は立枯れすることはないが下葉を枯らしついでかなりの高さまで葉を枯らすので、かなりの被害がある。

病原菌は縞紋枯病菌かこれに近い菌系であり、培養型は渡辺・松田のIA型と考えられる。これを葉腐病と新

称したい。

その2つは、前者に比べて発生時期がやや早く5~7月であり苗、葉、若い茎を侵す。葉は初め暗緑色のち黒褐色不整形の病斑を生じ間もなく拡大して一葉の全面を侵し、さらにこれに近接した葉や若い茎を枯らす。茎が侵されるとその部分から先は垂れ下りいわゆる首垂れ症状となる。

本病は初め下葉に発生し順次上位葉に及ぶとは限らず数節を越して上位葉に発生することもしばしば見られる。また苗を侵して立枯れを起こすが成木での被害は軽いようである。

病原菌は *R. solani* 型であり、0.5~1mmの菌核様物を形成し、培養型は渡辺・松田のIV型かIII B型に近い。

3 菌核病 (*Sclerotinia sclerotiorum* (Libert) et Bary)

4~6月に発生し茎、葉を侵すのでそれ以前は枯死する。病患部に白色のち黒褐色の大型の菌核を形成する。春季多湿条件下でかなりの被害がある。

4 灰色かび病 (*Botrytis cinerea* Persoon)

発生時期、被害とも菌核病とほぼ同様であるが、多湿条件下で病患部に典型的な灰色のかびを密生する。春季多湿天候下でやや被害がある。

5 ウィルス症

葉に緑色の濃淡がみられ、生育はやや劣るようである。発生は軽い。

6 葉先枯れ葉縁枯れ症

初め葉先や葉縁がやや黄化し、のちその部分が黒褐色となる。株出しに多い。株ごとの発生差が顕著であり、また株内でも茎によって発生差が見られることもある。発生は軽いが株出して病株率約30%の例もみられた。